

「夢」で会えたら…

住の江の岸による波よるさへや夢の通ひ路人目よくらむ 藤原敏行朝臣

訳：住の江の岸にうち寄せる波のように、昼はもちろん夜の夢の中でさえも、なぜあなたは人目を避けようとするのでしょうか。

作者の藤原敏行は、平安時代のプレイボーイ在原業平とは妻が姉妹という間柄で、業平に負けないプレイボーイだったと言われています。また名高い書家でもありました。

この歌は、会えない恋の辛さがテーマです。せめて夢の中だけでも会いたいと嘆く女性の気持ちになって男性の作者が詠んでいます。当時は、夢に好きな人が出てくると、相手も自分のことが好きだから、その人の魂が寝ている間に体から抜け出して、夢の中まで会いに来てくれたのだと考えていました。「自分が相手のことをとても好きだから夢にまで見ちゃった！」と考える今の感覚とは逆でおもしろいですね。また、寝間着を裏返して着て寝ると、夢で好きな人に会えるというおまじないもありました。パジャマを裏返しにして着ている平安貴族を想像するとなんだかかわいらしいですね。

小野田高等学校小倉百人一首かるた部顧問 青池のぞみ